藤村が描写した授業風景

（前略）学士は、手にしたコップをすこし傾げて見せた。炭素はその玻璃板の蓋の間から流れた。蝋燭の火は水を注ぎかけられたように消えた。無邪気な学生等は学士の机の周囲に集って、口を開いたり、眼を円くしたりして眺めていた。（中略）そのコップの中へ鳥か鼠を入れると直に死ぬと聞いて、生徒の一人がすっくと立上った。

「先生、虫じゃいけませんか」

「ええ、虫は鳥などのように酸素を欲しがりませんからナ」問をかけた生徒は、つと教室を離れたかと思うと、やがて彼の姿が窓の外の桃の樹の側にあらわれた。（中略）庭に出た青年は茂った桜の枝の蔭を尋ね廻っていたが、間もなく何か捕まえて戻って来た。それを学士にすすめた。「蜂ですか」と学士は気味悪そうに言った。（中略）その蜂をコップの中へ入れた時は、生徒等は意味もなく笑った。「死んだ、死んだ」と言うものもあれば、「弱い奴」というものもある。蜂は真理を証するかのように、コップの中でグルグル廻って、身を悶えて、死んだ。（後略）

（『千曲川のスケッチ』より）

◇◇◇